

# 国際政治とは何か？ - 政治的トリレンマを超えて -

京都大学文学部第 5 講義室

2015 年 2 月 6 日 (土)

## 1 国際政治とは何か？

まずそもそも政治とは何かという問いから始めてみる。共同体内での意思決定、権力闘争にすぎない、など様々な意見が意見が出たが、ここでは人民が人民を統治する営みとして定義しよう。

では国際政治とはなんだろうか？国際政治と国内政治で決定的に違う要素を考えてみる。国内政治の場は一つの共同体なのに対して、国際政治は共同体間で行われる。また国内政治の構成単位(主体)は個人であるのに対し、国際政治の場合構成単位は定まっていない。伝統的には国家を基本単位とするが、国家も個人の集合体であり、特定の個人が国際政治の主体となることもある。つまり国際政治の場となる国際社会には、各国内の政治、国家間の政治、国境を超えて相互作用する個人や集団が営む政治など、多種多様な政治が同時に存在している。多元的でバックグラウンドも異なる多様な主体が共存しているだけでなく、多様な政治が重層的に含まれている、このことが国際政治の大きな特徴である。

## 2 政治的トリレンマ

このように多様な構成要素によって成り立っている国際社会において、どのようなイデオロギーに基づいて国際政治を行うべきか、という答えも多様である。今の国際社会では次の 3 つのイデオロギーが唱えられている。

### ・主権国家体制

1. 主権国家は国際政治の唯一の基本単位である。
2. 主権は不可分かつ不可譲であり、国内社会では至高の存在であり、互いに対等である。
3. 個人の自由は自らが同意する主権国家を持つことで実現される。

### ・国際共同体

1. 主権国家は国際政治の基本単位だが唯一の主体ではなく、国際機構、社会集団や個人も一定の範囲で国際政治の主体たりうる。
2. 主権は少なくとも部分的に分割、委譲可能である。
3. 国際社会の諸アクターは一定の価値、目的を共有しうる。

### ・世界市民主義

1. 国際社会においても基本単位は個人である。
2. 国家は擬制に過ぎず、個人は世界に帰属する。
3. 平和は世界の(政治的、社会的、精神的な)統一によって達成される。

これら 3 つのイデオロギーは 3 つのうち 2 つを取ると残りの 1 つは達成できない、いわゆるトリレンマの状

態にあり、より良い社会を実現するために、どのイデオロギーに従うべきなのか、どのような国際政治のあり方が望ましいのか、ということが議論になっている。この議論は後でやることにして、どういう経緯でこのようなイデオロギーが生まれたのか、国際政治の形成の歴史を見ながら振り返ってみる。

### 3 近代政治史

#### 3.1 近代政治のはじまり

まず初めに近代的な政治の誕生まで遡ってみる。時は大航海時代、ヨーロッパ人が世界に赴き、地球規模のネットワークが形成されつつあり、教皇や皇帝の権威が弱くなり、社会秩序が乱れていたころ。近代的な政治観を提唱したのはマキャベリで、マキャベリはこの混沌とした社会で、新しい秩序になり得るものを探していた。

マキャベリのいた当時のイタリアは、外からはフランス・スペインが、政争の具としての教皇や神聖ローマ皇帝の権威を利用してイタリア内の都市国家と結びついて介入しており、内部にはキリスト教会の腐敗とそれへの反撥がもたらす不寛容があり、マキャベリは外国勢力を排除し、宗教的権威と厳正秩序を分離して、統一した政治体としてイタリア国家を統制することを目指していた。

マキャベリは、帝政ローマから中世に至る普遍的な秩序への希求こそが、現実には統治の力を持たない権威同士の果てしない争いを生み、社会を混乱させたと考えた。すなわち普遍的秩序の否定が近代政治誕生の根本にあった。国を超えた相互交流は再び中世の普遍的権威を復活させることになるため、国家間の政治は積極的に否定された。

新たな秩序として取り入れられたのは古代ローマの都市国家像で、古代ローマでは、政治への参加は絶対視されておらず、優れた政治を行うこと、技術としての政治（インペリウム）が重要視されていた。そこでさらに、インペリウムを誰かに委譲し、複数の権力を相互に貼り合わせる混合政体を行うという実践的柔軟性によって長期的な支配が可能になり、都市国家は帝国となった。そして自己完結した政治体としての国家同士の最低限の秩序として法がその役割を担った。これが国際政治の原形である。そしてナポレオンが皇帝となり中世の秩序は完全になくなった。

#### 3.2 国際政治へ

その後、人間、個人から出発し、その集まりの社会に政治秩序を基礎づけた。近代初期に世界市民主義が個人主義として再定義され、その後 18 世紀にかけて人間こそが自然の主人であるという考えが前提になり、人間が世界を知ったうえで、好ましいように作り変えるというあり方に政治も変わった。

国家のあり方も、領域国家（軍事力、徴税能力）から、国民国家（社会の承認の下で統治）へと変わった。自由な個人からなる社会という仮定から出発し、国家や政治を社会的効用という観点から基礎づけるようになった。

19 世紀からドイツでは「権力政治」と呼ばれる、国家が国際関係で権力の拡張を図るのは正しいという政治観が浸透した。このときから、国家間関係が価値の闘争の場になった。（国際政治の前段階）

啓蒙思想の世界市民主義の志向が西洋・非西洋の区別を相対化され、アメリカ革命で植民地が独立して国家を持つようになる。一方で、ヨーロッパ諸国家の政府が直接にアジアアフリカの植民地の獲得へ、国民国家-権力政治-帝国主義という三層構造ができる。

産業革命ともなうテクノロジーの発達で交通手段の発達により地球規模での活動容易になり、世界像が大きく変わった。このころから「国際政治」という言葉が使われるようになった。

従来の枠組みを飛び出すような政治が行われた。まず、ヴィルヘルム 2 世の世界政策、ほか英仏米など、権力政治の舞台が地球規模になった。技術の発達により増大した国境を超える交流を国際的に管理され（金本位制）、統治する越境的行政としての国際統治が行われた。世界の相互作用の高まりが、個人の忠誠を国家から

世界に移し、世界市民意識が普及され、世界国家・政府の設立に至るのを期待が高まった。もはや主権国家が完結体ではなくなり、世界規模で国際秩序をめぐる闘争が意識され始め、世界市民主義も現実的になった。このころから最初に述べた意味での国際政治が行われるようになった。

WW1の後、3つの国際政治イメージの関係を整理して、一つのバランスを見出す努力がなされた。WW1は国民国家の総力戦であった。国家に分かれて暮らす状況の否定され世界市民主義の思想が強まった。ウィルソンは互いに平等な政府が協力するために首脳会議の必要性を説いた。レーニンらソ連共産主義も世界政府を究極の目標に掲げた。一方で、世界市民主義がうまくいかないという人々の心理的惰性が生まれ始める。そんな中、ウェルズは理性に目覚めた少数者が世界を指導し、改造して平和的世界国家が創設されるというビジョンを唱えた。世界市民主義は理想として残り、国家の存在を前提として国家の行動に枠をはめる国際共同体を目指すことになる。普遍的道義の実現を目指し、パリ不戦などの国際法や国際連盟を初めとした国際組織が作られた。

しかしこれらはむなしく破綻することになる。パリ不戦条約は、イタリアのエチオピアへの武力行使や日本の満州侵略によって破られた。世界恐慌により、国際協力よりも国内経済保護を第一に考え、国際経済が無秩序になった。主権国家は社会福祉と対外的安全保障の機能を持つ行政国家に再構築された。

## 4 現代へ

WW2後、国内経済が落ち着いて、国際秩序再建の努力へと向かった。世界経済分断はマイナスと判明され、経済的安定には戦争のリスクない政治的安定も必要だと認識された。主権国家体制を中核に国際共同体として協力するという構図になり、国際連盟に変わる国際組織として、国際連合が結成される。民族自決、恐怖と欠乏からの自由の保障のため、大西洋憲章が調印された。ユネスコなどの知的文化的協力も政治権力と結びつくことになるなど、世界市民主義も復活した。

しかし、国連体制は、主権国家体制、国際共同体、世界市民主義の間に安定均衡を形成すると期待されていたが、冷戦という新たな権力闘争へ発展してしまった。

またこの頃、地球規模の世界観から発展し、宇宙時代が到来した。ソ連は1957年人類初の人工衛星スプートニクを打ち上げた。ミサイルギャップから、宇宙競争へと発展し、アメリカも1969年アポロが人類を月に送る。また、核攻撃を受けても停止しない分散型システム（ARPANET）の開発され、これは1980年代にインターネットとなる。

1985年INFが調印されたことをきっかけに冷戦は終わり現在に至る。

## 5 政治的トリレンマを超えて

国際政治史を振り返ることで政治的トリレンマという構図がいかにして生まれたのかがわかった。政治的トリレンマはいかにして乗り越えられるべきだろうか。

これまで何度も試練を超えて構築してきた主権国家体制の秩序をやめて、世界政府などの新たな政治秩序の可能性にける立場は果たして最善であろうか。世界政府に移行する過程では大きなリスクがある。近代に発明された国家は巨大な環境変化に適応力をしめしてきて十分有用である。宇宙やバーチャルに人間を住まわせることのできるテクノロジーの発達の中で、人間の再定義が求められているが、人間の伝統的な生き方を守るべきではないか、という意見もある。

また、柄谷行人は、主権を少しずつ国際機構に委譲していき最終的には国家の主権をすべて国際機構に委譲しきて、安全を保障されて公平に裁かれる支配を受ける道しかないと主張している。

世界市民主義に関してはカントに遡れば、『永久平和のために』の中で、「真の永遠平和は、決して空虚な理念ではなくて、われわれに課せられた課題である。この課題は次第に解決され、その目標にたえず接近することになる。」と語っている。

またディスカッションでは、トリレンマを乗り越えてどの立場にするかということをお問うことには意味はない。現在ある問題にそれぞれ適切な立場で取り組み、その都度各立場のあり方も変容していくことで、より良い社会を実現していくことが、現実的なあり方なのではないかという意見も見られた。